佐保会徽章

奈良女子大学同窓会佐保会

滋賀支部だより

2022年2月5日
佐保会滋賀支部
会員数　415名

≪はじめに≫

支部会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。今回の支部だよりでは、少し紙面を増やして、母校や奈良の様子、佐保塾の古墳巡りなど、情報提供の充実に努めました。一部、ホームページからの転載も含んでいます。皆様からのトピックスや近況など気軽に投稿いただければとお待ちしております。

≪次年度総会のお知らせ≫

新型コロナウイルス感染症の影響で、ここ2年間、6月の支部総会は紙上開催となり、その後もほとんど活動ができませんでした。今後も予断を許さない状況ですが、ウィズコロナの日常が戻ることを祈りつつ、次年度の総会について下記のとおり計画を進めていますのでお知らせします。なお、詳細は5月に改めてご案内いたします。

日時：令和4年（2022年）6月12日（日）10時から
会場：琵琶湖ホテル　5階　萩の間
講演：講師は奈良女子大学副学長様。法人統合や工学部新設、ご専門分野の話など予定。

≪おうみ佐保塾再開のお知らせと参加募集≫

「おうみ佐保塾」をZOOM配信を活用して再開したいと思います。初めての試みですが、パソコンまたはスマホをお持ちでWiFi環境が利用できる方なら、ご自宅などで参加いただけますので、お気軽にお申込みくださいませ。

日時：令和4年（2022年）3月15日（火）10時から1時間程度
講師：古市久子先生（S42文体）
演題：「てあそびと歌で身体をより輝かせて・・・　」
申込方法：2月末日までに、お手持ちのパソコンまたはスマホから、
メールアドレス： sahoshiga22@gmail.com にメールでお申し込みください。右記のQRコードもご利用いただけます。
本文には、「**おうみ佐保塾申込**」と明記の上、**お名前、卒業年、学部学科名、**パソコンまたはスマホのZOOM受信可能な**メールアドレス**をお知らせください。
例：おうみ佐保塾申込　佐保花子　S50家住　アドレス（×××@×××）
3月8日までに申込者のアドレスに**招待メール（お試し用と本番用の2種）**を送信しますので、そこにアクセスしてご参加ください。
＊ZOOM会議に参加するには、パソコンまたはスマホに**ZOOMアプリ（無料）**がインストールされている必要があります。インストール方法やアクセス方法など、わからない場合は、お申し込み時にあわせてメールでお知らせください。

★★★　久しぶりに母校奈良女子大学を訪問して　★★★

　コロナ禍発災以降、奈良にも母校にも「行きたいけど行けていない」会員様が多いのではないでしょうか。私たち編集部メンバーも、母校懐かしさが募って参りました。コロナ禍が少し下火になった 11 月、学生さんにご迷惑をおかけしない範囲での『支部だより』の取材を願い出ましたところ、幸い快くご許可いただけ、錦秋の大和路を目指すことになりました。

近鉄奈良駅からの懐かしい道を辿って正門に向かいますと、門手前の外塀に工学部新設を告げる横断幕が掲げられているのが目を引きました。門を入ると目の覚める様な紅葉に黄葉、やはり美しい母校です。

　文学部棟の外れにカフェが出来ていたのには驚きました。魅力的なメニューが並んでいます。コーヒーは 90 円。

　さて、新設の工学部はどこに出来るのでしょうか。実は、新校舎は建たず、体育館前にある大学院 E 棟の奥の「総合研究棟 H 棟」を改装して利用するそうです。工学部工学科 3 領域で定員 45 名です。

ここです

　佐保会館では本部役員の皆様にご案内をいただき、古い資料写真や 100 年以上前のピアノ等を拝見しました。本部の皆様にはリモート作業の相談にものって頂き有難うございました。

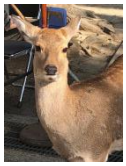
　校舎を後にして東門を出ますと、本部管理棟の前庭が工事中でした。これは報道等でご存じの、奈良女子大学と奈良教育大学が一法人二大学となる為の準備の一環です。二大学それぞれの独立は保った上で、相互協力できるところはする、という形になるそうです。残念ながらコロナ禍がブレーキとなって、スムーズに推進できない点もあるようです。

　ビッグニュースの多い昨今の母校ではありますが、新しい寮の誕生もその内の一つです。あいにくまだ遠くからの撮影しか出来

ない時期でしたが、戸建ての建物が数棟あるのが確認できます。二階建ての建物の内部は、キッチンやリビングを共有スペースとし、バス、トイレを含んだプライベートルームが三部屋ある、シェアハウス型の住空間だそうです。この寮は、住居学の先生方と学生さん方も加わって作られたもので、「これが完成形ではなく、研究の実験棟としての意味も持つ」との事でした。

今年６月の支部総会には大学から先生にお越しいただき、新しくなった母校についてお話をいただく予定にしています。どうぞ皆様お楽しみに。（コロナ禍に開催を阻止されないよう祈るのみです。）総務部の皆様にも大変お世話になり、母校での取材を終えました。

次に、興福寺に向かいました。久々に訪れた興福寺の境内では、平成 30 年に復元された朱色も鮮やかな中金堂が、目に飛び込んできました。



国宝・五重塔は、令和 4 年 3 月の内陣特別公開の後、約 120 年ぶりの大規模修理工事のため覆われて、当分その姿が観られなくなるようですが、塔のそばの木陰では、鹿たちがのんびりくつろいだ様子で座っており、晩秋の穏やかな風景がまだ変わらずに見られました。
その後、観光客もまばらな猿沢の池あたりのカレー店で昼食。

一休憩したところで、帰りは新大宮駅で下車して徒歩 15 分、紅葉が見ごろの不退寺に立ち寄りました。門を入ってすぐ右に見事な紅葉のグラデーションが広がり、池に映る逆さ紅葉もきれいです。つい、そちらを先に鑑賞してしまいましたが、在原業平公が建立されたお寺。どっしりとした堂がまえで、本堂、聖観世音菩薩立像はじめ５つもの重要文化財を擁する古刹です。心静かに拝観させていただきました。

その後、堀に囲まれた小ぶりな古墳を二つ経由して平城宮跡に到着。大学時代に見た平城宮跡は何もないただの原っぱでしたが、今や立派な建物が次々と復元されつつあります。

大極殿の屋根では鴟尾が陽光にきらめいていて、登ると往時の繁栄の様子が偲ばれました。
結局、大和西大寺駅まで歩いて奈良探訪を終えました。

高原（S60 文社）、山岡（S59 家被）、山仲（S53 家食）

★★★　第 21 回　佐保塾　史跡巡り　世界文化遺産　百舌鳥・古市古墳群
―古市古墳群を巡る―　に参加して　★★★

今年度の共催佐保塾は大阪支部が担当され、世界遺産の古市古墳群を巡るコースでした。コロナ禍にあって実施が危ぶまれていましたが、当初の一日日程を、午後半日に変更するという英断のもと、10 月 29 日（金）、無事成功裏に開催されました。私を含めて近畿各地から 44 名が参加。素晴らしい秋晴れに恵まれ、徒歩で約 5 キロの史跡巡りを堪能できましたので、その様子を報告させていただきます。

近鉄土師ノ里駅に 12：30 集合。3 班に分かれて史遊会のガイドさんの案内で古墳巡りに出発。駅前の道をはさんですぐのところにも方墳が！鍋塚古墳です。登れる古墳ということで恐る恐る登ってみると、住宅街越しに幾つか他の古墳の緑が見渡せました。大昔の名残と今の暮らしがそこかしこに入り混じって共存している不思議な光景です。

古市古墳群は、墳丘の長さが 200m を超える巨大古墳 7 基を含む 130 基の古墳で構成されており、4 世紀から 5 世紀にかけて造られ、大王とその一族、大王に仕えた人々の墓所と考えられているとのこと。

少し歩いて三ツ塚古墳に到着。3 基の方墳が連なっていて、特筆すべきは「修羅」と呼ばれる木ソリが全国で初めて出土したこととか。

次が応神天皇の皇后の仲姫命陵古墳。墳長 290m、堀に囲まれたきれいな前方後円墳で、陪塚（ばいちょう）として先に見た鍋塚古墳や三ツ塚古墳を従えた形です。とは言え、空撮ではないので、地上からの眺めは堀の中に前方と後円にあたる墳丘が連なって盛り上がっているというもの。

向かい合わせに位置する小室山古墳も前方後円墳で墳長 150m。こちらは堀に水はなく墳丘すそ野の原っぱで子どもたちが遊んでいたりしてのどかでした。

続いて見学した方墳の赤面山古墳は小ぶりで、高速道路下に工夫して保存されていてびっくり。大鳥塚古墳も前方後円墳で墳長 110m ですが、年月を経てかなり形が崩れていました。

そしていよいよ応神天皇陵古墳。墳長 425m、仁徳天皇陵古墳に次ぐ全国 2 番目の巨大な前方後円墳で、もとは二重の堀と堤に囲まれ、三段構成、周りに小ぶりな陪塚古墳をいくつも従えた堂々たる姿です。圧倒的な存在感。大きすぎて全体は見渡せませんが、整備された参道を進むにつれて厳かな気持ちが高まりました。

市役所で休憩ののち、羽曳野市文化財展示室へ。ここでは、発掘調査で出土した円筒埴輪などが所狭しと展示されていました。これらの円筒埴輪が墳丘の一段目にずらっと並んでいたところは壮観だった

ろうと想像をたくましくした次第。

この後は、墓山古墳、日本最古の官道である竹ノ内街道を経て、日本武尊白鳥陵古墳へ。遠征の帰途、伊勢で亡くなった日本武尊が、白鳥となって大和を経由して古市に飛来し、西へと飛び去ったという旨の記述が日本書紀にあるそうです。この時、羽を引くがごとく飛び去ったことから羽曳野市となったとか。由緒ある地名だったのですね。白鳥陵古墳は、堀の水に浮かぶように墳丘が緑濃く盛り上がり、青空に映えて、その名の通りどこからか白鳥が飛んできそうな風情でした。

最後に近鉄古市駅まで歩いて解散。何度も下見をしてご準備いただいた大阪支部の皆様や、地元ならではの目線で丁寧に案内してくださった史遊会のガイドの皆様に感謝しつつ、心地よい疲れとともに帰路につきました。

次年度は兵庫支部の皆様に神戸の街をご案内いただけるそうです。山仲（S53 家食）

★★★　私の創作裏話　★★★　　松本匡代（S60 理物）

リケ女が時代小説、何故？

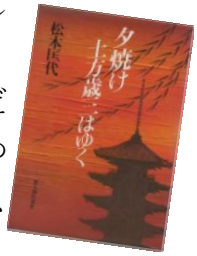
いつでもどこでも誰にでも、まず訊かれる。書きたいから、好きだから、これに尽きるのだが、これでは誰も納得しない。そこで、文系理系の分け方の他に文化系と文明系という分け方を考えた。学問的には、世界四大文明と日本の縄文・弥生文化の様に規模の大小の違いだそうだが、そんな小難しいことはこの際横に置いといて、私のなかでは、文明は暮らしを豊かにし、文化は心を豊かにするもの。もっと違った言い方をすると、「直ぐに役立つ文明系、いつか役立つ文化系」。だいたいは理系が文明系で文系が文化系なのだが、理論物理、特に素粒子理論は、直に何の役に立っているかはわからない。文学や歴史と同じ文化系だ。だから、私が時代小説を書くのは何の不思議もない、そんなハチャメチャな論理で煙に巻く。それでも納得してくれないときは、奥の手出す。先天性脳性麻痺で言語障害あるので、子供のころから音声で伝えにくい分、文章を書いていましたと。これでかなりの人は納得してくれる。でも、これをやると「また、障害を便利につかった」と、心がヒリヒリ。やっぱりホントは好きだから、好きに理由はない。旨いもんは旨いのです。

付けたい題名が付けられない

「新選組　試衛館の青春」に最初に私が付けた題は、「試衛館青春草子」。どうです、かっこいいと思いませんか？　でも敢え無く却下。理由は、「新選組」と検索したとき引っかかる方が有利だということ。内容は新選組の前身である浪士組に応募して京へ上る前の話。後に新選組の幹部となっていく九人が近藤勇の経営する道場で、男子寮の寮生たちの様に気楽に青春を謳歌していた時の話なのに……。作者が無名であるが故の悲劇でした。

登場人物の名を付ける苦労

今まで５作の小説を出版しているが、いつも悩むのは、登場人物の名前だ。たかが名前、されど名前。名前なんてどうでもいいと思うでしょう。そう、どうでもいいのだ。しかし、いざ付けるとなると、これがなかなか難しい。どうしても自分の頭の中に潜在的にある名前を付けてしまう。そうすると知り合いの名前であることが多い。主人公とか所謂「ええもん」ならいいのだが、「わるもん」とか犠牲者とかにうっかり親しい人の名前を付けてしまうとえらいことになる。



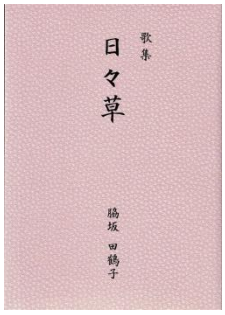
実は「新選組　試衛館の青春」は、もう少し殺伐とした話にするつもりだった。ところが、第二話で殺すつもりの女性にうっかり母の親友の名前をつけてしまった。元気な方だったが、お歳もお歳だし、（うーん、殺せん）と、すっかり話が変わってしまった。結果、第二話だけでなく全体が今あるように「ほのぼの系」になった。この話をすると、「名前変えたらええだけの話やん」と言われる。正論だ。が、それまで作って来た人物の人となりと名前がワンセットになっている。だから言うほど簡単なことではない。といって話を変えるのも大変なことではあるのだが……。実のところは、殺伐とした話よりほのぼの系の話の方が私に向いていただけなのかもしれない。恐らくそうだと思う。そうは思うが、その他にも知り合いの名前を付けてしまって、殺せなくなったり、「わるもん」にできなくなったりで、気が付いたら私の作品には、時代小説なのに「わるもん」が登場しないものが多い。最新作を除いて実在の人物を主人公にしているのも、無意識に名前つける苦労から逃げているのかもしれない。

なんか、愚痴ばかりになってしまってごめんなさい。こんな感じで、好きでやってることとはいえ悩みながら、でも楽しく書いています。出版不況でこの先どうなるかわかりませんが、世の中どうなっても、どういう形でも書き続けて行こうと思っています。

★★★　歌集『日々草』を拝読して　★★★

脇坂田鶴子さま（S36 家食）が歌集を出版されました。高校の家庭科教員の大先輩として活躍される姿は、私も心強く頼りにさせていただいておりましたが、その日々の忙しさの中で、あたたかな、そして少し茶目っ気のある歌を詠んでこられたことに改めて感服するとともに、心よりの敬意を表してご紹介とさせていただきます。

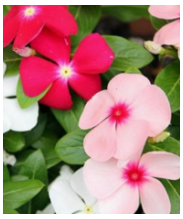
以下、感想は高原さんにバトンタッチさせていただきます。　山仲（S53 家食）



母であり、祖母であり、妻であり、教師であり、子でもあり、友でもあり、市民であり、そして田畑で生命を育む人でもある作者の、誠実に、愛情深く、エネルギッシュに生きてこられた証とも呼べる名歌の数々を、しみじみと拝読させていただきました。いずれ劣らぬ魅力的な短歌ばかりですが、私の心に一番深く刻み込まれ、読む度に涙を誘われるのは、次の歌です。

ベテランのとび職一人逝かしめて建ちしセンターに検診を受く

事故の直後にはニュースにもなり、そちこちで気の毒そうに囁かれた事でしょう。でも、竣工した後には、何事も無かったかのように、人々は新築のビルを享受します。でも、作者は忘れないのです。「その方はベテランだった」と、死者への敬意も忘れないのです。なのに、ご自分が長生きをする為の検診を、他ならぬその場所で受ける事に……作者は、その後ろめたさを直視します。「これが世間であり、我々全員がその世間を作っているのだ」という苦い現実を、他者を責めるのではなく、自らの懺悔として語っておられるのだと感じ、感銘を受けました。



食料品山積みにする籠の中芥川賞の「文春」も乗せ

この歌にも強く心を惹かれました。「山積み」の「食料品」から伝わってくるのは、家事にも大忙しな作者の日常です。しかも、「芥川賞」受賞作が誌上に出るのは真夏か真冬、厳しい季節です。生活するだけで精一杯であっても何の不思議もありません。ですが、文学の世界に、そして世間の耳目を集める話題に、作者のアンテナはしっかりと向けられています。私もかくあらねば、と元気をいただける歌です。

名歌の宝の山から、たった二首しかご高覧いただけないスペースの僅少ぶりに、編集者の一人として痛恨の思いです。今後の玉詠も拝読かつご紹介させていただきたいと願うばかりです。

高原（S60 文社）

★★★滋賀支部のホームページより★★★ ←ここからもホームページに入れます。

パソコンやスマートフォンの（Yahoo!などの）検索画面に、**佐保会滋賀支部**　と入力いただきますと、滋賀支部のホームページがご覧になれます。地区委員のホームページ担当者（小南葉子Ｓ57 家住）が適宜更新をしておりますので、時々覗いていただけましたら幸いです。

本紙では、その記事のほんの一部を、再編集してご紹介いたします。

ご受勲お祝い・村澤民子さま　〈ホームページ記事の抄録・一部再編〉

前号にてお知らせしました様に、滋賀支部の村澤民子さまが、永年の教育界でのご功績を讃えられ、瑞宝双光章をご受章なさいました。コロナ禍の為に諸事順延となり、支部からのお祝いも待機いたしておりましたが、この夏、無事にお届けする事が出来ました事を、ここに報告申し上げます。

村澤さまは、理学部数学科をご卒業の後、大阪大学勤務を皮切りに、大阪府の私立高校、公立中学、京都府の公立中学、公立小学校で、数学科教員、教頭、校長（小学校の校長を経て、長岡第四中学校で乙訓エリア初の女性中学校長、その後一校で校長職）を、お勤めになられました。

この、小学校から大学までという幅広い教員生活の中で、生徒指導、保護者対応、管理職としての危機管理や教職員指導など、様々なご経験をなさいました。更に、学校運営にコンピューターを活用することの啓

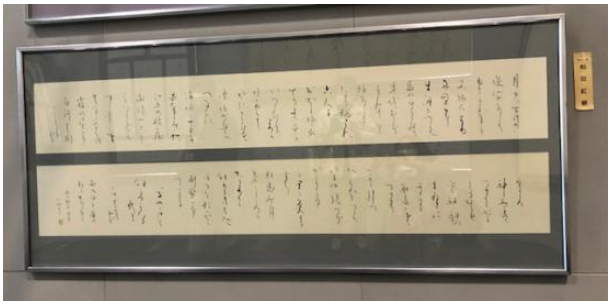
発・普及、校舎の防犯・警備の機械化、文科省による学校評価スタート、等々、教育界の新しい波へのチャレンジの連続でもあったそうです。

ご専門の数学教育に於いては、生徒の学力向上と「数学を好きになってもらえるように」努められました。今も続けておられるテニスの経験を活かされて、部活動のご指導にも力を注がれました。ご苦労はあっても、生徒との信頼関係ができてゆく喜びが大きかったそうです。

特に心に響きましたのは、勤務時間を終えていったん帰宅され、お子さん方の夕食や入浴のお世話をされてから、また学校に戻って勤務時間外の緊急職員会議に臨まれたご経験談でした。女性が家庭と仕事を両立させるのは大変に困難な事。でも、こうやって頑張ってこられた先輩方がいて下さったお陰で、後ろに道が出来たのだ……と痛感いたしました。ご受勲、本当におめでとうございました。高原（S60 文社）

芸術の秋・書道編　〈ホームページ記事の抄録・一部再編〉

滋賀支部・地区委員の和田隆子さん（S49 理物）が所属されます『水穂会』の書展を鑑賞すべく、錦秋近づく京都に行って参りました。



和田さんの作品は、松尾芭蕉『奥の細道』序章（冒頭部）。文章の内容を知っているお陰で、文字の選択や散らし方、紙色や墨色との調和などに気持ちを注いで味わう事が出来、堪能致しました。芭蕉翁の「旅をせずにはいられない」思い‥我が家を他者に譲渡し（つまり退路を絶って）、一方で、まだ見ぬ奥州に夢を膨らませる、そんな、覚悟や期待が、仮名作品という形になって伝わってきます‥しばし時を忘れて没入いたしました。

他の皆様の作品も大作から小品まで、多種多様にして力作ばかり。堪能させて頂きました。

コロナで修学旅行生のいない秋の京都は、少し寂しい風が吹いておりました。休業中や廃業後の店も散見され、観光地に余りにも厳しかったパンデミックを思いました。

高原（S60 文社）

★★★　編集後記　★★★　坂本城の石垣

秋の深まりゆく頃、「明智光秀ゆかりの坂本城の石垣が、渇水により湖中から出現した」というニュースが報じられ、現地に向かいました。前回（27 年前）の大渇水で出現した時よりは水位が高く、見え方は少なかったそうですが、石垣の根石（石垣の土台の石）の配置はしっかりと確認出来ました。もしやこれは光秀からの何かのメッセージで「あと少しでコロナは鎮まるよ」という意味ならうれしいな、と思いつつ帰宅しました。皆様と心置きなく再会できる日が早く来ますように・・・　（編集子）